

# 令和元年度第1回都市科学部運営諮問会議議事録

日時 令和元年7月19日(金)15時00分～16時42分

場所 事務局本部棟3階 第1会議室

出席 平野雅之、宮坂久美子、高尾成弘、青木優介、川添裕（主宰）、周佐喜和、中村由行（陪席）

欠席 勝地弘

## I 報告事項

### 1. 今年度運営諮問会議委員のご紹介

川添学部長から、資料1に基づき、今年度運営諮問会議委員について紹介があった。また、中村都市基盤学科長が陪席する旨の発言があった。

### 2. 前回議事録の確認について

川添学部長から、資料2に基づき、平成30年度第2回運営諮問会議議事録について確認があり、原案の通り承認された。

### 3. 都市科学部に関する報告

川添学部長から、資料3に基づき、現在の都市科学部の課題や伸ばすべきところ、都市科学部の最近の動向及び収入・支出について以下の説明があった。

- ・新設から2年が経過した都市科学部の課題や伸ばすべきところとして、「都市科学」のイメージが確立できていない点や広報の強化、入試志願者の減少、及び学部としての一体感が足りない点等が挙げられる。

- ・都市科学部主催のイベントとして、IR検討調査・意見交換会（7月10日）、都市科学シンポジウム（7月13日）、都市科学部キャリア支援セミナー（7月31日）、羽沢横浜国大開設イベント（秋予定）を企画している。

- ・収入額については、学年が進んだことにより、学生相当分と科目の追加による非常勤講師手当及び来校旅費が増加している。支出については、非常勤講師手当及び来校旅費が収入額に比例して増加し、環境整備及び建物等補修・保守費等も微増している。

## II 諮問事項

川添学部長から、資料4に基づき、都市科学部の設置趣旨やカリキュラムについて説明があった。

その後、川添学部長から、社会が必要とする文理融合について各委員に諮問したところ、以下のような意見があった。

## 1. 社会が必要とする文理融合とは

・企業は大学のように文理を分けて仕事をするところではない。軌道を敷き、車両を走らせ、緻密なダイヤで動かすためには、科学技術だけではなく大勢の通勤客の人口動態や行動パターンを基にして案内する必要がある。このように、鉄道の例一つを取り上げても、文理融合無くして世の中は動かないということが分かると思う。入学したばかりの学生には、このような身近な事例を用いることで都市科学について理解できるようにしてほしい。

・専門知識は必要だが、対象となるものを総合的にとらえられるような一般教養が求められているのではと思う。医学一つをとっても、求められる専門性は最たるものであるが、病気の治療だけではなくそれによる生活の質の変化まで考慮しなければならない。専門性に立脚しつつ、幅広く問題の本質をとらえられる人が求められていると思う。

## 2. 社会が必要とする都市科学とは

・都市科学と聞くと理系のイメージを受けるが、実践の舞台は市町村であり、その土地の歴史や自然環境、住民感情への配慮が求められると思う。社会が必要とする都市科学とは、科学の普遍性に則りながらも地域の多様性を活かす学問なのではないかと思う。

・今の高校教育は文系特化、理系特化ということではなく文理両方をバランスよく学ぶ形に変わりつつある。このような流れの中、都市科学部が行っている教育は理想的なのではないだろうかと思う。国の教育審議機関のHPを見て文理融合学部を推進するような文言を見たとき、横国がやっていることは間違っていないと思った。ただ、専門性は必要であるとも思う。また、生徒に都市科学部のイメージについて聞いたところ、理系のイメージを強く持っていて、都市社会共生学科のような文系のイメージはあまり持っていないようだった。

・木更津市周辺では、老朽化した橋の撤去にあたって地域住民との合意形成が難航しているという話を聞く。合意形成の進め方は都市が抱える大きな課題なのではないかと思う。そういうことを踏まえると、IR 検討調査・意見交換会は学生にとって大きな経験だと思う。合意形成には文系の力も理系の力も必要だと言うことを学生に知ってほしい。また、学生が意欲的にそのようなイベントに参加するような状況になってほしいと思う。

・専門性と幅広い視野に立脚した場合、建築や土木はコアがあるが、社会科学だと何がコアになるのかわかりにくい。「この分野で学んだ能力はこういう業界で生かせる」というようなアピールを外に向けてやってみるのはどうだろうか。

## 3. 都市科学と文理融合を伸ばしていくための現場と関係したイベントとは

・UC サンディエゴ校では、街が抱える高齢者福祉の課題・解決策について、学生と高齢者のチームで考える賞金付きのコンテストを行っている。また、ハザードマップの赤い地区（大きな被害が予想される地区）の有効活用をテーマにしたアイデアコンテストも行っている。このような例は都市科学部でも参考にできるのではないかと。

・高校生のみならず、社会に向けても都市科学部の広報が必要なのではないかと思う。

・南万騎が原では、古くなり居住者が減った集合住宅を、様々な世代が住めるように

リノベーションしている。また、空洞化した商店街の活性化について横浜国立大学の学生・教員に考えてもらっている。学生からしてみれば、身近に起きている問題をもっと感じることができる良い機会である。都市科学部の学生には、相鉄沿線をフィールドにして活動し、日本の社会が抱える課題を知ってもらうことで、自分がやっていることは決して無駄ではないということを知ってほしいと思う。

・新しい駅ができるということで、街の賑わいが増えて家賃が上がると思う大家さんもいれば、静かに暮らしたいと思われる高齢者の方もいるのではないかと思う。駅周りの開発がこれから進むと思うが、そういった住民に「ここに駅が増えて良かった」と思ってもらえるようにしていきたい。横浜国立大学にはこれから話をさせていただき、上手くまちづくりができるようにしていきたいと思う。

#### 4. その他

・都市科学部各学科のパンフレットを見ても各学科が、やはりそれぞれの学科であり、学部としてのまとまりが見えない。建築学科は「都市科学部建築学科」ではなく、あくまでも「建築学科」としか見えてこない。文理融合で横のつながりのある「都市科学部A・B・C」のような授業をやっているというところが見えてこないのもったいない。もっと工夫が必要である。

以上